

自分を見つめ直して

幸の鳥医院

岡本雅弥

生涯の仕事

この2年間、39年生きてきた中で最高に喜怒哀楽を経験したように思う。

私が15歳のとき、両親が離婚し、私は母と二人暮らしになった。看護婦をしていた母は、「これからの女性は、技術を身につけることが大切。何があっても自分や家族の生活が守れるように将来を考えること」。これが、母の口ぐせだった。将来に向けて確固たる夢を持たなかった私に、耳にたこができるほど言い続けてくれたおかげで、私は助産婦の道を歩み、しあわせな家庭、平和な世の中を作るのは助産婦なのだと思えるまでになり、そのやりがいを見いだした。そして、15年間病院で多くの経験を得ることはできたが、多くの助産婦が感じるジレンマに私も落ち込んだ。任務中心の業務で助産婦の思うとおりの業務ができないこと、医者との正常産に対する考え方が違うなどの理由により満足感が感じなくなったのである。自分の理想を追えば追うほど仕事をするのが苦痛になり、心身共に疲労し、感受性までなくなってしまう状態になった。

助産院開業！

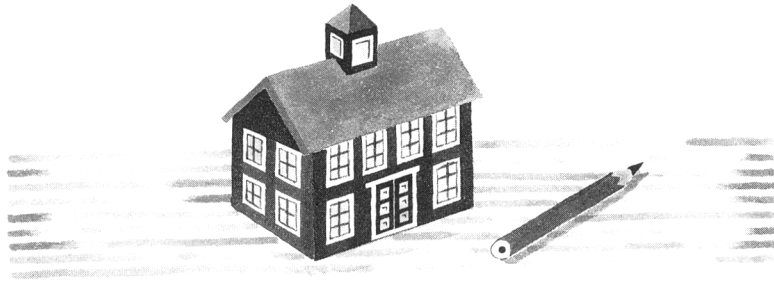
そんなとき突然、開業することを思いたち、約半年で準備をした。夫以外にはほとんど相談せず、一人で進めていったのだが、後になって母に知らせると、母は激怒した。「まだ子供が小さいのにどうする！失敗したり病気になったらどうする！今、苦勞することないのに！自分のことばかり

考えて。周りに迷惑がかかることも考えなさい！」と、親子の縁を切ると言わんばかりであった。

どこにそんなパワーがあったのか、とにかくビルの店舗を貸りて、平成6年4月助産院を開業した。出産・育児相談だけでなく、いろいろな人のかけこみ寺になればと願い、「お母さんと赤ちゃんの家・おかもと助産院」と名付けた。

初めての訪問者は、宣伝用の広告を握り占めて、妊娠したかもしれないという高校1年生だった。妊娠8週目だった。親にも彼にも話せない。お金は友達のカンパで持っているので中絶してくれる病院を紹介してほしいという。私はその前に、母親や彼には話して、いっしょに考えてもらいたいと思うことや、生命の尊厳とは何かなどについて3日間かけて話をしたが、4日目から姿を現さなくなった、1か月後、再び彼女が来て「結局、親には言えなかった。年齢を偽り中絶した。でも3日間、助産婦さんからお話を聞けてうれしかったし心の支えになった。本当にお腹の子供には悪かったと思ってるし、これからは絶対こんな思いをしたくない」と言った。罪悪感なく中絶したかもしれない彼女が、悩み苦しみを抜いた結果の中絶であった。自分の存在が無駄ではなかったと思ひ、涙がこぼれそうになったことは今でも忘れられない。

助産院を訪れる人は、ほとんど「こんなお産がしたい。母乳で育てたい」といったポリシーを持っている。10か月間、バース・プランと一緒に考え、なるべく産婦の希望に添うように援助し、出産後も長くつき合ってゆく。彼女たちのおかげ



で、自宅出産や水中出産の援助もでき、大きな感動を経験できた。また、70歳前後の開業助産婦さんたちは、若い助産婦の開業を喜んでくれた。先輩たちは、確固たる予防の概念に基づいて行なう伝統的な助産ケア、技、コツを惜しみなく伝授してくれた。最初は経営も大変だろうとアルバイトもさせてくれた。この時期に開業して本当に良かったと思ったものだった。反面、“孤独感”、“責任感”が肩に重くのしかかり、ポケベルを持った生活は想像以上に大変だった。

突然の病気から…

昨年の春から右乳房のしこりを感じていたが、「今、病気になれない!」と自分に言い聞かせていた。秋になり、しこりが増大した気がして病院に行った。

乳癌だった。血の気が引き、これほど目の前が真っ暗になったことはなかった。「なぜ、今こんなに合わねばならないのか! 子供たちにさびしい想いをさせ、夫や親たちにも迷惑をかけ続けた恩返しもしていないのに!」と、くやしさと申しわけない気持ちでいっぱいだった。しかし、家族や友人はやさしく励ましてくれ、前向きの気持ちで治療を受けることができた。自分が患者の立場に立つことで、いろんなことが見えてきた。今まで自分がしてきたケアの反省をし、そしてこれからのお手本としてさまざまなことを学ばせてもらった。手術は大胸筋まで除去する広範囲なものだったが、幸いに転移もなく、1か月で退院できた。

そして約3か月間、家事をリハビリとし、今後

のことを考えられるようになった。助産院継続には、今度は母だけでなく、夫や夫の両親も反対した。私は、以前にはあった、どんなに反対されても一人で突き進んだパワーが自分なくなっているのを感じた。日常生活に支障はなくても、今の自分の体は以前とは違う。一人ですべてのことに責任を持てるだろうか、分娩をしばらく引き受けなくて経営はできるのだろうかなどと頭に不安がめぐった。そして、開業後、約2年で廃業届けを出した。自分が、こんなに甘く弱い人間だったのかと思い知らされた。

再出発そして夢…

現在、「自然分娩、母乳育児」をモットーとする幸の鳥医院という赤ちゃんといっしょに夢まで運んでくれそうな名前の医院で働きはじめた。一から地域看護を勉強し、自分の経験したことも還元できたらと思っている。今、家族は一息ついている。また子供たちという時間も増えた。少しずつしあわせの方向に向かっているが、時々、胸の傷跡を見てうじうじ泣き、挫折感に悩むみじめな自分がいる。しかし、戸涙の数だけ強くなれるよ アスファルトに咲く花のように戸と“Tomorrow”という歌にもあるとおり、こんな涙が私を強くしてくれるだろう。自分を見つめ直して、良い条件がそろったとき、再び「おかもと助産院」開業という夢を持ってがんばっていきたい。

今回は、開業後ずっと分娩時に手伝っていただき、私と同じ夢を持つ若い助産婦さんで、国立小倉病院の瀬ノ口恵美さんをお願いします。

